編集後記

1995年４月に千葉大学附置で10年時限の全国共同利用施設として発足した環境リモートセンシング研究センター（CEReS）が、創立30周年を迎えることになった。筆者はCEReS創設時に他大学から千葉大学に移り、2020年に世界的にコロナ禍が始まった時期に定年を迎え、その後もグランドフェローなどの形でCEReSにお世話になって現在に至っている。新設された全国規模の共同研究センターがその歩みを開始し、当時の所属教員が熱心な議論を継続的に行って進むべき方向性を定め、国内外の共同利用やシンポジウム開催、そしてデータ提供を通じてこの分野の一つのハブとして機能できるようになるまでの一部始終を目の当たりにすることができたのは、ある意味で幸運なめぐりあわせであったように思われる。この間、日本や欧米諸国を中心に衛星リモートセンシングが質量ともに大きく発展し、ドローンによる近接リモートセンシングや機械学習AIを利用したデータ解析手法など、30年前には想像も難しかった手法の進展もあった。

本冊子は、CEReSの30年間の歩みをリモートセンシングに関する研究や教育の成果、国立大学を取り巻く状況、全国共同利用施設から共同利用・共同研究拠点への変遷などを含めて取りまとめたものであり、CEReSとしては（その前身のセンターを含めて）最初の周年記念誌となる。服部克巳センター長からこの30周年記念誌の編集を担当しないかというお話が筆者にあったのは2024年３月半ばのことであった。４月には筆者が委員長、服部克巳センター長と本郷千春准教授を委員とする30周年記念誌編集委員会を立ち上げ、年報、外部評価報告書、CEReSニュースやパンフレットなどの公刊資料を収集するとともに、５月には概要案を作成し、教員会議での承認を経て執筆作業を開始した。

平成から令和にかけてのこの30年間には世間全般の価値観も大きく変化し、現在の視点からするとあってしかるべき情報が不足する部分も見られたが、毎年の研究・教育の進展を記載した年報を軸として大学附置センターとしての諸活動に関する30年間のデータを冊子として取りまとめることができた。とくに、創立当初の状況については、工学部100周年記念誌の中で天然色工学研究施設や映像隔測研究センター関係事項の編纂をちょうど担当されていた竹内延夫元センター長・名誉教授からの情報も得ることができた。とくにトピックとしてとり上げた事項としては、創立から最初の約10年間においてセンターのコア課題であったモンゴルプロジェクト、外部資金により立ち上げた地球温暖化寄付研究部門、長年にわたって維持・発展の努力を行ってきたCEReSが提供する地球環境データ、国立大学附置の４センターの共同で長期にわたって継続している４大学連携VLの活動、そして地球診断学を標榜した西尾文彦教授による大学院GPがある。

現メンバーによる特色ある研究成果については、第６章にまとめて掲載した。リモートセンシングは理学と工学の境界分野であり、様々な環境パラメータの計測を通じて社会的な応用分野も多く存在している。CEReSの研究の進展状況を比較的まとまった形で概観して頂けるよい機会になれば幸いである。

記載内容の全般的な確認についてはセンター長秘書の田中直美氏に、表紙デザイン・本文レイアウト・写真・印刷会社との連絡調整については市井研究室技術補佐員の小菅生文音氏に、また、専任教員・運営委員会委員の名簿および巻末の附表については西千葉地区事務部理工系総務課のセンター支援係（リモセン事務室）の皆様にそれぞれお世話になった。紙数の関係で限られた人数ではあったが、CEReSで博士の学位を取得して現在、リモートセンシングおよび関連分野で活躍している国内外の方々からは第４章末にある寄稿文を頂いた。ここに記して感謝を申し上げたい。

第２章に記載してあるが、創設期の専任教員の中にはすでに他界された方もあり、年月の重みを感じさせられる。国立大学附置の共同利用センターの活動は、もちろん千葉大学や文部科学省の支援があって初めて成り立つものであるが、同時に、30年にわたって協力を頂いた内外の多くのコミュニティの研究者、CEReSを巣立っていった学生各位、そして常勤・非常勤の研究者の方々の日々の努力が継続して30年間の成果につながっている。本冊子が、その公的な記録の一端として後世に役立つことを願い、編集後記の結びとしたい。

2025（令和７）年１月

千葉大学環境リモートセンシング研究センター創立30周年記念誌

編集委員長　久世 宏明